



Title	池玉瀾研究
Author(s)	木下, 京子
Citation	大阪大学, 2012, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/59375
rights	
Note	著者からインターネット公開の許諾が得られていないため、論文の要旨のみを公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、 ＜a href="https://www.library.osaka-u.ac.jp/thesis/#closed">https://www.library.osaka-u.ac.jp/thesis/#closed >大阪大学の博士論文についてをご参照ください。

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

【33】

氏 名	木 下 京 子
博士の専攻分野の名称	博 士（文 学）
学 位 記 番 号	第 2 5 3 4 1 号
学 位 授 与 年 月 日	平 成 24 年 3 月 22 日
学 位 授 与 の 要 件	学位規則第4条第1項該当 文学研究科文化表現論専攻
学 位 論 文 名	池玉瀾研究
論 文 審 査 委 員	(主査) 教 授 奥平 俊六 (副査) 教 授 橋爪 節也 教 授 藤岡 穰

論 文 内 容 の 要 旨

本論文は、十八世紀の文人画家であり歌人としても知られた池玉瀾（1728・1784）の生涯と画業について、文献資料を広く収集し、作品を網羅的に調査し、それを一つ一つ再評価することによって、その実像がどのようなものであったかを論じたものである。第一部は人物研究、第二部は作品研究の二部構成となっている。

第一部第一章「史料から探る玉瀾の生涯」では、菩提寺である西雲院の過去帳と墓碑、『大雅堂家譜』『季廻記』『平安人物志』『冷泉家門人帳』などの同時代資料、あるいは野呂介石筆「池大雅居室図」、伝月峯筆「大雅堂居室図」など直接交流のあった画家が大雅・玉

瀬夫妻の居宅を図示したもの、さらに藤原家孝『落果物語』、岡野逢原『逢原紀聞』、澁齋老人『書畫見聞録』、二宮孤松『雲烟瑣談』など江戸後期の伝聞資料を再検討して、玉瀬の実像の輪郭を明らかにしていく。また、歌人であった玉瀬の母百合とその母梶をめぐって、朝日重章『鸚鵡籠中記』、神沢杜口『翁草』、頼山陽『百合伝』など数多くの資料をあけて考察し、梶、百合、玉瀬と続くいわゆる「祇園三女」の家系の実態を明らかにする。第二章「玉瀬の人物像の成立と展開」では、明和四年（1767）の上田秋成『世間姿形気』から幕末明治の『烈女百人一首』、『日本賢女百人伝』までの文献を取り上げ、玉瀬の人物像の変遷をたどる。第三章「画家としての玉瀬の評価」では、まず『平安人物志』『新撰和漢書画一覧』『富貴地座位』『賞春芳帖』など明和、安永期の生前の史料を検証し、さらに中林竹洞『画道金剛杵』、田能村竹田『山中人饒舌』など画史画伝類に記述された没後の評価を見る。それに加えて『諸家人物志』など各種人名録、「古今名画競」を初めとする番付表、「新書画価格録」などの価格表まで取り上げ、作品の評価の変遷をたどり、一時期過大に評価された理由について考察する。

第二部の作品研究では、第一章「落款と印章」においてまず『近世名家書画談』『故人諸名家印章譜』から『古画備考』まで公刊された款印を確認した上で、実作品の款印を整理して分析する。第二章「玉瀬作品の基準作と年代考」では、年紀を伴う作品、幀によって制作年の推定が可能な作品を含む山水画を中心に玉瀬の画風展開を考察する。玉瀬の画風展開は夫であり師でもあった大雅の影響が常に問題となるが、明和元年（1764）の年紀をとまう「夏景山水図」（フィラデルフィア美術館）、また宝暦九年（1759）以前に描かれたことが明らかな「悟心元明画賛梅岳帰隠図」（敦井美術館）などを軸に考察を進める。その上で大作「西湖図襖絵」（金戒光明寺）を大雅のさまざまな西湖図と比べて、その位置づけを明らかにし、玉瀬の画風展開の基準線を策定した。第三章「画題別作品考察」では、第二章の結果を受けて、大雅の影響のあり方で玉瀬の山水図を三つのカテゴリーに分けて考察する。さらに玉瀬が好んで描いた梅、竹、蘭、菊などの草花図について、「草花図押絵貼屏風」「四君子小屏風」を中心に玉瀬画の特徴を抽出した。第四章「扇面画」では、もっとも遺品の多い扇面画について分析し、基準となる作例を明らかにした。

論文審査の結果の要旨

本論文は、江戸時代の文人画家池玉瀬について論じるものである。本文は 135 頁（400 字詰原稿用紙に換算して 550 枚）、これに資料編と図版編が付随する。第一部の資料にも神原文庫、加賀文庫などの所蔵者名があるが、これらはすべて公刊されたものではなく、オリジナルの資料を自ら撮影したものを提示している。第二部で扱った作品リストにあげた総数は 345 点、玉瀬の作品図版は 168 点、参考図版が 166 点に上る。その中には、国内の寺社、美術館、博物館および個人コレクターのみならず、フリア美術館、ホノルル美術館、リンデン民族学博物館など欧米の美術館、個人コレクターの所蔵品も数多く含まれているが、これらもほとんどが自ら調査したオリジナルのデータを用いている。

従来、玉瀬の研究が滞っていたのには、上記のように作品の所在地があまりに広いこともあるが、それとは別に研究対象としていくつかの困難な点があった。一つは、江戸時代もっとも高名であった文人画家池大雅の妻であったこと、もう一つは、梶、百合と続く、市井の歌人の家系にあったことである。いずれも本人とは別のところで評価の対象となる要素であり、さらに夫唱婦隨の生き方が喧伝されて、幕末から明治にかけて烈婦の一人として取り上げられ、画家、表現者とは別のところで評価されてしまい、そのことが没後の作品価格をつり上げ、さらには多数の贋作が生み出される素地となったと考えられる。本

論文は、これらの困難な状況を果敢に乗り越えようとしたものであるが、これはフィラデルフィア美術館の学芸員として「大雅と玉瀬」展を開催し、常に日米欧を行き来する申請者であるからこそ可能であったことであろう。第一部では、大雅と結婚した時期を絞り込めたこと、また『冷泉家門人帳』の記述によって従来考えられていた入門日の年月が大幅に違うことを明らかにしたこと、さらに画賛の年月を推定することによっていくつかの作品の制作時期を確定できたこと、そして幕末から明治に至る評価の変遷を明らかにしたことなどが重要な成果である。第二部では、明和元年の「夏景山水図」、鴻池家の扇面の重要性を明らかにしたこと、また『大雅堂画法』の用い方の分析などその成果は多いが、中でも金戒光明寺の「西湖図襖絵」の分析は特筆される。この襖絵は従来、菩提寺の本寺である金戒光明寺の書院を飾っていたものとされてきたが、実は近代に購入されたものであり、補修、改変が甚だしいことを明らかにした上で、補筆の入っていない樹相などの部分にやはり玉瀬の盛期の筆触がうかがわれ、さらに構図やモチーフの扱いに大雅の西湖図の影響が顕著である点を指摘し、大雅の影響を正当に受け取った玉瀬の代表作の一つであると再評価したことである。また、こうした地道な作業を通じて、玉瀬の画作の中心線を提示することができたことはもっとも大きな成果である。

賛文の読みや、大雅と結婚する以前の柳沢淇園の影響に関する考察など踏み込みの甘いところもあるが、しかし、そうした欠点を踏まえてもなお、余人の及ばない労作であり、玉瀬に関する現在唯一の総覧の役割を果たすことは間違いない。また本論の成果の上に立って、さらに深い新たな玉瀬の作品論が展開されることが予想される。よって、本論文を博士（文学）の学位にふさわしいものと認定する。